

## Sentence Introduction of “Wadentakagyou The latter volume the 36th~the 53rd” of EISEI-BUNKO MUSEUM

Yasuko NIHONMATSU

### 永青文庫蔵『和傳鷹経 上下』（資料番号3・3・44） 「下巻（三六丁～五三丁）」翻刻

二本松 泰子

#### 【凡例】

- 一 翻刻は永青文庫蔵『和傳鷹経 上下』の下巻部分に該当する三六丁～五三丁によった。
- 一 翻刻に関しては、できるかぎり原文に忠実になるようにつとめ、改行は原本に従った。
- 一 明らかな誤字や脱字などと思われる箇所はそのまま翻刻し、傍らに（ママ）をつけた。
- 一 改丁は「をもつて示し、（一オ）のように丁数ならびに表裏を示した。
- 一 改行は／で示した。
- 一 字体は底本の表記を重んじて旧字体の場合はほぼそのまま翻刻した。
- 一 朱引き・朱線については適宜記載し、（朱）と示した。なお、「・」記号はすべて朱書きであるが、それについては、特に示していない。

#### 【書誌】

所蔵 永青文庫。資料番号3・3・44

外題 表紙左上にウチツケ書きで「和傳鷹経 上下」。

内題 「和傳鷹経上」（一丁表）。「和傳鷹経下」（三六丁表）。

寸法 縦26.0㎝×横18.5㎝。【装幀】袋綴じ。

目録 上巻の目録は一丁表～三三丁裏に記載。下巻の目録は三六丁表～三七裏に記載。

巻数 一卷。

丁数 五五丁（うち遊紙後二丁）。

行数 半葉一行無罫。漢字平仮名交じり文。

奥書 上巻の奥書に「右鷹書依上意所令書寫進上之如斯／明應五年閏二月日／前信濃守神貞通奉」（三五丁裏）。下巻の奥書

に「右鷹書依上意所令書寫進上之如斯／明應五年閏二月日／前信濃守神貞通奉」（五三丁表）「宝暦十一年辛巳以宇土之書寫之」（五三丁裏）。

蔵書印等 一丁表、五三丁表、五三丁裏に「財団法人永青文庫蔵」の正方印有り。

※当該書の上巻については、二本松泰子「永青文庫蔵『和傳鷹経 上下』（資料番号3・3・44）「上巻（一丁～三五丁）」翻刻」（研究紀要（長野県国語国文学会）第12号、平成29年12月）を参照されたい。

#### 【本文】

・和傳鷹経下／

・目録／

一・鷹置次第事／

一・餌袋様事／

一・水吹事／

一・鷹に毛の付事／

一・鷹仕作法事／

一・荒鷹仕入事／

一・同鷹取飼事／

一・巢鷹を仕入事／

一・鳥屋鷹を取飼事」三六オ

一・吉凶日事／

一・山神祭にち山口事／

一・山出の時木に書符事／

一・同偈文の事／

一・鷹狩犬飼装束 付墅出作法事／

一・取飼様 付取飼くハせ鷹のつくの事／

一・鷹の鳥包丁之事／

一・鳥柴寸 付鷹鳥懸様同鳥竹にはさむ様餌袋鳥さす様座／

敷様／

一・鷹屋飼事 以上／

・鷹置次第事」三六ウ

一・朝と夕とおくへし夜中に一度をくへしこふしにておく様／  
む可習之也鷹をにかしたらんハ置餌なく共おくへし／

こふしの内に餌をにきりてかくしみせずして斬くのちに／  
拳の中より餌を取出て飼へしさておきつけぬれハこふしにて／

餌をはくらしいけると思ひてこふしにて渡なり／

一・晩景の鷹ハ木にあけて家にてよひかけて耳やすくなす／

へし主をしらすへし／

一・いらぬ鷹ハこふしの上よりくる也なつく時は下よりくる也／  
これを以いるを知らり／

一・置之名をはいかにもいろ／＼かくる也おもくかくるは悪也／  
一・内にて鷹にむち渡する事むちをもちて鷹をなふりて」三七オ

をけハよく渡る也また才をもおしふる也墅にても如此たる／  
へし巨細猶口傳有云々／

・鷹に餌を飼次第事／

一・新き鳥なれとも上の皮をむきてあふらを取て飼へし／

すいはたを飼は鷹の鼻たけおこる也又肉色くろし／

耳かたかるへし又古餌は清水にてかふへし冬ハ熱湯／

にて赤色をかへて飼へし餌水おほく入て飼は水臭／

に入て鼻たけとなる也／

一・鷹に餌を高くもちてかえすへきと云病つくさけて／  
飼は目見へすして晩景の鳥をとらすと云鳥からすひ／

きからす餌つゝみの中にあてゝかふへし」三七ウ

一・寸餌あひたの餌ひくえと云事有いつれも餌をかふほとハ／  
おなし物なれ共飼様によりて鷹の様もかわる也しゝを／

ひけハとて餌をすくなく飼事ハ有へからすしゝをひく時は／  
すの飼をかふひくえと云は骨餌也／

一・鳥のかしらをハかわぬもの也又餌をあらそひて湯ともに飼事／

あしき也又水にてあらひてかふ事わろし夏なりとも／

湯にて洗て紙につゝみてしほりて飼へしかみともにかひ／

つくるかよき也其謂は墅にて口餌なき時昏はかり見すれとも／

飼つけられてハ渡る也秘傳也昏はおはして鷹の葉なり／

一・やうしをつかひて齒の内外を能うかひして水を一口含て／  
きりのことくに先暖ぬあけさまに鷹をみなしてせへをほとに」三

八オ

吹へし両目に吹入よ背より吹たる也側より吹へし又塩を飼ハ／

くるしからるれ共手のしはゝゆきハ常に病發也心得へし／

・鷹に毛のつく事／

一・別の子細なし鷹飼のひんよりからす手を洗ハすしてあせ／  
たるをよく洗ハぬけのあせ鷹のとくになる也鷹にむかふハ／

手を洗てひんをかきやうしをつかひてむかへハ葉となる也されハ

／

鴉鷹ハ経を手に取りかことしといへり／

一・鷹仕作法事／

一・禁墅の鷹墅は雪ふれともきらハすといへとも雪の朝にハ／  
ゆめ／＼仕ふへからす鷹飼鷹をかなしめハ鷹おゝく飼よりかなし

む／

鷹飼鷹をにくめハたか鷹飼をうとむこれをよく／＼さとれ」三八

ウ

一・秋鳥屋を出さゝる時とやにて肉をおとして出しすえ又／  
骨餌は女鳥のくひ骨をかへかりはしかみを飼又かた塩をかへ飼て

／

水よりかへ秘へし口傳有也水をあひせよ又常に湯をぬるく／  
して餌を入てかへとや鷹に肉をこしらゆるにハおとして取飼て／

次第にかひあけるさて肉のたかきをハ鷹の心に随へし又／

常におくへし荒鷹をすゆるにハ外へすへて出へからす夜ニ／  
すへて手にてかへりをさし身振をもして手袋よりひん／

とするをもてなしたるとハ云也其後肉をおとして吉／

置餌を以をけす装束をして晩景の比さはやかなる木に／  
あけて鷹の顔をつねにみるに物をかくる事あり其時ニ／  
肉よしとみて墅へ出てはやらん鳥に手はなちせよめく」三九  
オ

ひくへからすひきつな手とりする事あり／

一・相のとくのほりたらん鷹を尋て仕へしをかんときハ置縄／

をさしてすへしまつ夜々すへて三回もすへし一夜／

ほこになつて夜明さらんとりてすへよ鷹をすへむけ／

さらんにほかへ出すへへからす鷹すへんうしろに物をおきおとろ  
く／

様にすへからすものにおとろき鷹くせつきてはいかにたし／

なめともなをらさる也其儘鷹おとろきて仕ハれすして／

そんな事あるへし能々おきて浮誠に入たる時くせハつかぬ／

なり猶々物におとろかん事あしかるへし十日すへても／

一度物におとろきぬれハ又荒鷹よりもなをあしき鷹の／

見めもわろしいかにもしつかにしておとろかぬ様にすへし様こ」  
三九ウ

お、くしるしたれ共これらのま、也／

一・鷹尋常に仕やう又御所鷹仕様ともあり心の尾をこへ腰を廻り  
／

またちかくと取穴とりならしぬれハ名羽とひたりと見して／

ひとよりなれ共とりかふへし鷹を賞翫の儀なり常よりお、く／

餌もかふへしかくおもしろき羽とひぬれハ餌をハお、くかひ／

けりと心有鷹ハ知る也ハしてよき鷹飼といふハ三より四より／

にはすすきうなる時は七よりにすへからす兄鷹ハ二より／

三よりにはすすきうなる時ハ四よりにハすすきすたとかひの／

したの毛うすくかさりおとさす尾助をす、かさすほらの／

毛をおとさぬを尋常の鷹飼とは云也つかハすともきよけ／

に有へし」四〇オ

・荒鷹仕入事／

一・信遠国上落の鷹をハ一日二日もくらき所につなきて可休其後  
／

餌をくハすハ夜すへをすへし又架に餌を給て置ハ食也／

うちおろしの鷹ハ二日も餌をくわさる事ありくるし／

からす鶴こえだかも大鷹も夜を返すに日数ハ定るといへとも定／

りなし鷹にしたかうへし一夜にても脇へか、り口餌を／

よくひかは夜を過して其儘曙に墅へ出て五打程まで／

すへて次日むきを見て呼へし大緒わたりなとせハも／

みて手はなしをせてすへし口餌いかにも新物をこしらへて／

細々ひかすへし一口二口には過へからす餌をぬる湯にて／

洗へし水はう作しとむ湯はよくすくなり湯にしめて」四〇ウ

飼へし鷹いりく／とせんとときまづは、を飼へし巨細故実ハ／

口傳有也／

一・荒鷹にはやくおこえを聞すへからす聞ぬれハ耳かたしねす／

なきはかりにて可呼也／

・荒鷹取飼事／

一・鳥を用意して狩て立たる夜に合てつかれをかたすして／

はめたらハぬくめてもちたる鳥を取出し音して飼へし／

はめたる鳥をたてんとすれハ犬におそれ又はおとろきて／

立はしりぬれハのちにくせになる也然間ぬくめ鳥を飼ハ／

はめたる鳥を取たりと心得間次の日ハ又いろ／と見ゆる／

なり」四一オ

一・荒鷹を七日に合事いまた足緒をさ、ぬさきにひんせりをくみ  
の／

さね引と□たらし引雨水其地のの流合の水と云ねやし合て／

鳥の肉をうすくすきてつ、みて飼へしさて足緒を／

さして起して其夜はみとりのほこにつなくへし次日よりすへ／

ぬれハ物にもおとろかす影るをかれなく也水をあいすへし／

六日七日にならハそ、くあるへからす鷹の心むきを見て／

ゑすき所なくハあかすへしなをすきものならハ二三日も合す／

へからす合様ハし、め餌を飼へしもし十日をも過ハち／

からえをかふへし子なりとも二人にをしゆへからす鷹を／

たしなむ事つかひつけの鷹ハさうなく矢一からすよき／

鷹ハ一代に一といへり鷹の命の事ハ一日十までいくへし」四一ウ

古書云  
・君かかふくちけのとやの毛の数は百十かへりのやかたをの鷹／  
巢鷹を仕入事／

一・尾羽やう／おひそろいたらん時にハトリのあか女鳥をむねの／

肉をこまかにたゝきてなめる湯をおゝくしめて飼さて／

其後やき塩をかふへしいまたのり毛の時はわらにてふこを／

作りてよもきから蓬をしハ／しくへし餌あたらしきより／

ほねをよくたゝきて飼へしのり毛つはな毛つはなすり／

まてハ餌をおゝく新敷を骨身をよくつくりてあらハすして／

飼へし又むらこになりぬれハとき／餌を洗て日に二度かひ／

さたむへしのり毛つはな毛つはなすりの時なふりにて餌を／

かひぬれハ毛羽躰悪しさてつはな毛より足緒をさして「四二オ

大かこ若ハさしこに鳥やをさしてふこなから入へしゆかけ／

をさして常になふるへし又物をよくみをつくへし後ハあかけ／

よりも物おとろきもする間能々心得てなふりあつかふへしさて／

又むらこになりやう／尾羽生れ揃ふ時分にかこふつなき／

ていかにも／日によく／あてよ日にあてつくるさへあかけな

／

とのやうにもなくあつかりをする也水をハ尾羽そろひて二三日／

又は毎日にも常にあひすへし尾羽揃ひなはいかにも手をハな／

さすすへしよくすへ付てをき縄にてをきにたし／細々／

に置へし巢鷹にあかけよりも大事ありさのみなつきて／

あさゆるも心もわろし又おとろきをしあらきも大事也／

市すへをよく／すへし鷹いろ／と見えハときよろはしを「四

二ウ

飼へし又物を見せて何にてもはやらん物にあハすへし／

一・鳥の骨はとや鷹にかふほとかへ三回は足緒さしなからなま／

ぬる湯をあわせ装束せぬさきに水三度あひせ三日の程／

石灰を三度かふへしところを三度飼也其後四日といふ事／

申の時にあわせよゆふハはなして十日こしらへて十日の程／

塩を三度かふへし／

・鳥鷹を取飼事／

一・とやの内にてにハトリの赤女鳥の肉を細にたゝきて水をたか

／しめてかへさせ其間かたしほを飼へし第一の薬なり水を／  
かふへし一日に水を三度あひせ餌はたちはなほと飼へ／

し水は五日に一度あひす「四三オ

一・塩を飼て其夕かたいのこつちの根からすの羽まふしを／

水に出してそれに餌をひたしたちハなほとかふへし湯を／

常にかふへし六日三度水をあひすへし又夜取澤の水／

をかふへしさて申の時合する也是ハ七日内に合する薬なり

一・大鷹などに女雉の頸の骨にからはしかみのわつかに／

ませてかふへし又湯を常に飼へし湯にてハうちす／

くへし水はうちしとむへし又とりかわぬさきにハ肉／

をひきてとり飼ぬれハ肉をあくへし但鷹によるへし／

つよくあらき鷹をはやく墅又はそとへ出せハ入ぬる也／

すへおりてみふるひをもし又かへりをもさして手袋をも／

ひかハ墅へ出して吉置餌にて呼へし肉をひきさまに「四三ウ

肉をは拵物也其後に装束をしてまた墅へ出して物をも／

みハ肉をこしらへてよきものに手放をすへしはやるものに／

ひくへからすたとをる事有／

・鷹吉凶日事／

一・吉日 寅申／

一・忌日 戌午未

昔人に鷹を渡す  
へからす万忌す

未日ハ鷹の行年也午日ハ本命日也万事忌へき也／

・山神祭号 山口事／

一・犬飼山神祭は先玉女の身に向て笠をぬきて置鳥の羽／

を三ぬきて笠をきて春は女鳥をもちい四方鳥の羽／

をハ緑の羽と申也再拜の比郷里に祝ハれ給ふ有を「四四オ

いむせぬの御神を吉日良辰を以玉の男鳥玉の女鳥を／

ならふもの也郷鷹の聡あく羽はやく御馬の障たいらかに／

犬飼の聡而御犬の鼻明り不誤鈴の聲高く谷をこさ／

す心順をこさす玉の男鳥を一日千数とらせ給へ真金の女鳥／

上毛下毛奉て架上にすゆるまで足を鳥練し給へ／



・山出の時木に書府事／

一・ 急々如律令／

山墅の鹿鳥万の狩に出る時柳の木に此府を書いて懷に可／  
持也／

一・ 鷹を仕人墅に出る時此文を唱へし 三篇／

帰命日天子 本地觀世音」四四ウ

為度众生故 普照四天下／

一称一禮者 滅罪除苦 惱／

現世安樂國 臨終任正 念／

一・ 諏訪大明神御記文 三返／

業尽有情 雖放不生／

故宿人身 同證佛果／

・ 鷹狩犬飼装束 付 墅出作法事／

一・ 鷹飼の装束ハふしく、りの水干に大目結のあかね／

そのきぬにすそのはかまに帽子をする也黒色也／

腰蓑をあて、も、ぬきのもくつをはく也餌袋にハ男」四五オ

鳥をさすへししたけを見せよ口傳有也／

一・ 鷹飼は家を出るより笠をさすへし若ぬかんとおもハ、／

頸にかくる也常にせこをいさめよ春秋は笠を着／

冬は帽子をする也／

一・ 鷹飼墅に出るには一町に或ハ二度或ハ三度犬をよふ／

墅におし入て馬の足を七度歩せほたい聲を三聲／

あけよ鷹を第一番にハ女鳥にとりかふへからすととり／

かひつれハ七度までハ女鳥につくなり心得へし／

一・ こふしの事合時のき也なけこふしみをこふしにて有／

なけこふしハ鷹を脇にかまへて鳥頭を出すなけ／

つくる也みせこふしハさし出て見するこれらハ鵲也」四五ウ

大鷹はみねに高くさし出て鷹を構てとさけひをき、／

て鷹をいたすせこ犬飼ハ谷そこをふみあかりふみくたりかる／

へし／

一・ 犬飼の装束ハ赤革の袖に口傳有也無數のみなふすへかわの／

袴を着すへしく、りを結ふなり／

一・ 犬飼犬をはなす時笠を頸にかけて狩杖を右の方につき犬と／  
鷹に鈴さして後笠をきる也／

一・ 犬をよふ聲打出て三聲つかれにはむかはきのすそを和らかに

／

うちて聲を出すへし一町に一度聲を出て草を打是を／

童杖と云心に入て犬を放はしめに此木をた、きて入へし／

鳥さけひて三聲返かやまた勞の鳥を見て犬をいるし」四六オ

すこしやすめて入へし犬鳥にあたらさらん程ハやり聲をす／

へからすあたりなハさけふへし／

一・ 犬飼又ハせこ鳥を見つけたる時の事犬飼又ハせこにても鳥を

／

鷹狩の方へものなと云へし其心は打と、のへよと云心也／

其ときはたかもちた、おひ立よと答へし但其時の様に／

よりて答へし／

一・ 犬飼は犬をはなたさらんとははたひ聲をあくへし／

鳥た、はいたくさけよと云心也」一町に一度つかれ聲をする也／

つかれこゑと云はけいと云也けいとハ鳥と云心なり／

またたつともいふ也けいよふといふハ鳥立そとをしふる／

心なりほそ／とおめくハ鷹をよふなり鷹をおうとも」四六ウ

いへり鳥をおふかゆへに唐人おふといひしをこ、にて和して鷹／

といへりくちそと鷹を云ハ本朝にて具とい、しものか／

ちえにて鷹をつかひ始しゆへに其名を取てくちなと云也／

なつくる時すこしつ、飼餌をくち餌と云ハ此ときのいわれ／

なり三条院御宇になつつけ餌とも云也又つかれの時ハ犬を／

せゐして侍へし笠をぬき手にもちて杖を右のかたにつ／

けてよれ犬を入るときはわらハ杖を打て入る、也杖に同平故也／

犬のあしからんとはつかれをあらくやれ犬をはなたさらん程は

万／

事をしつめてのとかにほたい聲をあけよ鳥た、ハ鳥さ／

けひをせよ又鷹おくれて鳥はしりぬけハさけへおつ、きて／

かためは鷹のむきたらんかたよりしつかによりて鳥の足」四七オ

二をそろへておもふほとむしらせてさてひさにはさみて押／

ころして飼へし生たる血をかふ事ハ鷹の毒也それ夜いこ／  
かせと云病つく也押ころしても鷹を休め鳥をさまして／  
かふへし口傳在也／

・取飼様 付取飼数はせ  
事鷹つ、以下／

一・鳥を取たる時巢鷹も又あかけもとやたかも又山かへりも  
いかにもかりよりて足を取て取よりて鳥をおし殺／

して女鳥を右脇男鳥をハ左の脇を小力にてかき切てまる／  
をぬきて飼へし女鳥のまるハ右にあり男鳥のまるハ左に／

あり澤又谷川などはたにてかふへし鷹の顔にも水を／  
そかくへし水をすくいかけて鳥をよくさまして鳥の「四七ウ  
むねを常の餌三分一ほとかふへしくちはしを洗鞭にてはしを  
すらすへし水をかけられハうちもすき又ちくさき千百も／

なかるへしこれハいつれも同じ事なり鶺鴒に鳥をかふもさ／  
まして飼へしあつきちをか多ハ大鷹小鷹共あしけ／

出くるやは待しなり又病つくへし／

一・鷹に鷹をとらせてハおゝくかわぬ事也少かふへき也故実／  
有也雀三ほとハ返る也一二ほとハかふへき也／

一・うさきをとらせてハへに肉をかふ也ほうの肉也／  
一本云一・鳥くはせの口を羽ほろをぬきてましぬいにぬいておく也／

一・鶺鴒取飼事うつら小鳥いつれもかしらをむきて飼也くひの／  
中ほとふむきてそのかわをさせてそゝけぬやうにするなり「四八  
オ

くそ袋のうへよりむねのへんまでかわをむきてむねを二三に／  
うへよりおりてくそ袋のかたへひつくりかへせはほねハ出也／  
さてかひてのちかわをうへにきせてそゝけぬ様にする也／

一・鴨をとらせてハかい方の羽うらをかふ秘事也／  
一・鷹を取飼数事／

一日に一を飼二日に二をかふ三日に三を飼四日に一をかふ五日に  
／

五をかふ六日に一を飼七日に二を飼八日に二を飼九日に三を飼／  
十日に一を飼又五を飼／

・右努力云々五に過へからす是にすくれハ鳥を取に不能也又命／

もなし様も疲也又云鷹に鳥を取かふ様水のはたまで／  
鷹の顔に水をそゝきて鳥の左のむねを破て肉をひきて「四八ウ  
水をかけて血をまふして飼あに玉のつきもを飼又鷹の／  
命廿一さう経に見えたり命長相有といふとも悪すれハ／  
其命短仕有ともよくすれは命長也毒の餌をかふ／  
へからす／

一・つゝの事大鷹ハ七兄鷹ハ五／  
一・鶺鴒つゝの事鶺鴒を云小鷹飼飼餌廿八程に仕とて朝の／  
狩に雲雀五十夕の狩にはひハり五十とらする也ねりひはり／

の時の傳也／  
・鳥柴の寸 付鷹鳥掛様同鳥付にはさむ様  
飼袋鳥さす様座敷にかけ様／

一・大鷹／  
・春は桜又ハ柳秋は柴禁裏より日次の費を得也此等を「四九オ  
冬は松 三季は以椎柴木也然時之風用事雖為略儀有其謂也／

雉を付す鳥と木の間五寸也又ハ結目のきはにも付也／  
上を少おきて結てもつくる又一結しても杖に掛けても出也木  
のえも鳥を付也／

・掛様一の枝に男鳥二の枝に女鳥を付也男鳥ハ左一の枝の  
女鳥ハ右一の枝の／  
事木はもとより末を三と申たとへハ見る所ハ男鳥は／

下枝女鳥ハ上枝の付し枝に付しと申候へ共もと木の枝との  
きはに付し物にて候但春は女鳥を一の枝に付也男鳥二枝／  
右に懸也／

一・山の鳥をハ根藤にて是を懸うしろにかくるなり結目五寸  
はかりおきて片結にする也女鳥男鳥によりて片結「四九ウ  
順達有へし左右の心也めんとりハ藤をわりて是をかくる也／

木につけすして掛時は上を手一束ふして結て切也／  
一・田物はなわにて掛也前にかくるなり／  
一・是をかくる様飼方の面になる様に四えたを引そろへて  
下に二まきして十文字にして結てかくるなりうしろ足を／

飼方の上に成へし藤にてもなわにても掛也／  
一・鷹鳥座敷にかけ様事大鷹の鳥をハ座敷の上へ向て／  
懸也兄鷹の鳥をハ下座へむけて掛也但何も飼方を／

おもてに向て掛<sup>云々</sup>／

一・鶺鴒萩鶺鴒以下之小鳥をは昏捻にて懸也又草に付る／  
ときは草の葉にても付る也かけ様大方同前寸は」五〇オ  
さたまらすよきほとにする也／

一・鶺鴒を竹にはさむ事鳥の頸と羽かいをはさむなり／  
あにいをよきほとにすへし女鳥男鳥によりてみより／  
たなさきの羽を少出る様にはさむへし／

一・餌袋に鳥さす事鳥を餌袋にさすハミのかたへ脇の／  
方なる様にさす也しかれハすなハミ鳥の面に成／  
なり大鷹の餌袋には男鳥是をさす兄鷹の餌袋／

には女鳥是をさすなり／

・鷹鳥包丁事／

一・飼方を本に包丁をあつるなり／

・鳥屋餌事」五〇ウ

一・繫とやといふハ架・架のたけ二尺五寸又は二尺二寸廣さ三尺二寸に／

細縄をつよく引はりてもとをしのは、の穴にとおして／  
鷹あなたこなたへ行ハはしるやうにする是をハはしり／  
架と申いかにもくらくすへし是はとハせもせずあや／  
まちなし鳥やをいたりてひろくすれハす、しきといひ／

よろつにわろし毛をおとしかたしはしり架のとやハ／  
例式のつなきとやのこづくにしてせはく闇々して／  
日の一日によくあたる所にすへし桃の木の下にて飼へ／

桜の木を架にせは病つかすと云々但牀に埴へし／  
朝日のあたる所に東むきにして南西の日にあつるを／  
よしとすいかにもよき餌のあたらしきをかふへし」五一オ

一・むす鳥屋の事はいかにもとやをちいさくして水を入／  
すしてまわりのうちにはよきからよきかけたま／  
そとうへには雨のもらぬやうにして鳥のこえをあつく／  
かくへし日のあたる事ハいづれも同じ事也此とやにてハ／

常に人參散をかふへし毛のよく落て生る時ハむし／  
もの鳥のこえをとるへし／

一・例式用鳥屋ハ放鳥屋也四方を板にして上をハ棟を／

出て片棟をハ橋籠にして雨を入日にあつへし水／  
をも入あひすへしむしとやと云是ハ足緒を切て／  
入へし放鳥屋といふ／

右卯月八日に東へ立妻鳥「南には川鳥を妻と」「五一ウ

一よりに取飼て鳥屋に入へし是を忌飼と云也かくて／  
七月十一日にいたすへし又五月五日にとやこめて九月九日に／  
いたす時七月十五日の聖霊のはしを取てあつめて／  
たい松にして出す夜ならてハ出すへからす此故に／

鷹を箸鷹と申也先とやの内にて肉を引て鶏の／  
赤女鳥のむねの肉をたゝきて湯をしめて飼て／  
うちをすかすへしさてまた塩を飼てとやの中／  
より肉をこしらへて夜人静て出すへし懷様また／

取飼様箸鷹におなく故実在也／  
一・鳥屋へ入てむつくる事鳥屋をいたして湯をかふ／  
なり餌をすこしつゝ、かふ也」五二オ

一・鳥屋こむるときハこしあふらを合て付と又夜取／  
澤の水を飼へし忍澤の水といふなり／

右鷹書依 上意所令書写進上之如斯／  
〔朱〕明應五年 丙辰閏二月日／

前信濃守神貞通奉

〔財團法人永青文庫藏〕の正方

印」五三オ

宝曆十一年辛巳 以／

宇土之書寫之／

〔財團法人永青文庫藏〕の正方印」五三ウ

【付記】 本稿をなすにあたり、神長官守矢史料館の柳川英司氏か  
らご教示を賜った。感謝申し上げます。

（平成29年9月25日受付、平成29年12月8日受理）

